

日本武尊の東征Ⅰ

景行天皇四十年夏六月、東方の夷人の多くが叛いて、辺境が騒がしくなりました。秋七月十六日、天皇は群臣を集めて言いました。

「今、東国が心配である。荒ぶる者たちがたくさんいるようだ。蝦夷は朝廷に叛いてしばしば人民を奪つてしまふ。乱れを平定するため、誰かを派遣しよう。」

群臣は誰を派遣したらよいかわかりませんでした。その時、日本武尊が勇ましく声をあげて申しました。

「熊襲が平定され、そんなに年月が経っているわけではないのに、今度は東国の乱暴者たちが騒ぎ始めました。いつか着ち着かせることができましよう。私には大変な重荷ですがすぐに乱れを平定しましよう。」

「日本書紀」

東国の蝦夷

天皇は吉備武彦とおおとものたけひのちひらとて、日本武尊に同行させました。また、料理番として七擲脛を同行させました。

東国の様子を視察して戻ってきた者が天皇に次のように報告したと『日本書紀』に具体的に書かれています。

東国の者たち(東夷)は性格が凶暴で悪いことばかりしている。村に長も首もないので一つにまとまっていけない。東国の者たちは領土を奪い合つて

いる。山に邪神、野に姦鬼がいて往来する人々を苦しめている。

東国の者たちの中には特別強い蝦夷と呼ばれる集団がいる。男女一緒に住んで父子の区別はない。

兄弟でも信用しない。冬は洞穴で寝て、夏は森に住んでいる。

毛皮を着て、動物の血を飲んでい

る。飛ぶように山を登り、獣のように草原を走っている。

恩を忘れ、恨みははらす。髪を束ねた中に矢を隠し、衣の中に刀を入れている。

領地を奪い収穫期には作物を略奪する。

弓を射ると草に隠れ、追いかければ山に逃げる。

昔から今まで朝廷に従ったことはない。

これらからイメージするのは桃太郎と戦った鬼の姿ではないでしょうか。

大和朝廷が全国を支配していく過程で各地の首領たちと戦っていますが、その首領たちは朝廷にとって「まつろわぬ者たち」であり、後世には賊や鬼と呼ばれ、悪者のレッテルが貼られているのです。

『日本書紀』による遠征路

紀をもとにして筆者が推測した行程



これらからイメージするのは桃太郎と戦った鬼の姿ではないでしょうか。

伊勢の倭姫命のもとへ



媛を妻としました。二人は都で一揃に暮らしていたと思われれます。

都を出発した日本武尊は東に向かい伊勢を目指しました。当時伊勢までの道は山越えで南下して熊野に出てから北上する道と現在の国道二五号で伊賀を経由する道、あるいは宇陀から名張を経由して松阪から南下する道があったようですが、山越えの少ない方を選んだのではないかと思われます。この道沿いに日本武尊に関する伝承がなく、伊勢神宮までのはっきりした行程はわかりません。倭姫命の元伊勢伝承地が



三重県伊勢市 伊勢神宮内宮
宇陀、名張、伊賀、亀山、津、松阪とあるため、ほぼこの伝承地に沿って伊勢神宮に向かったのではないでしょう。各地を巡幸した倭姫命が最終的に落ち着いた

日本武尊は出発に際して都近くの伊射奈岐神社(上写真)で弟橘媛と一緒に戦勝祈願をしました。日本武尊は東征に出かける前に羽曳野で出会った『古事記』による(弟橘



三重県伊勢市 神宮のある地で、水清らかな五十鈴川が流れ、巨木が立ち並ぶ神聖な場所です。日本武尊の東征時、倭姫命はここで天照大神を祀っていました。

西征の前にも訪れ、景行天皇の妹で尊にとつては叔母に当たる倭姫命から御衣を授けられ、それが熊襲征伐に役立ちました。この時、熊襲と戦う知恵を授けてもらったのかもしれない。東征の前、日本武尊は再びここを訪れ、かつて素戔嗚尊が八岐大蛇を退治した時に得た天叢雲劍(後の草薙劍)と火打石の入った袋を授かりました。



『古事記』では、倭建命は倭比売に父天皇は「自分に死ねと

嘆いています。倭比売は天叢雲劍と袋とを授け、危急の時に開けるよう言います。これから倭建命に起こるであろう災難を予感しているのです。『日本書紀』では、日本武尊は東夷征伐を本当はやめた

いと打ち明けます。倭姫命は天叢雲劍(後に草薙劍)を授け「油断するな」と励ましました。

倭姫命が授けたもの

記紀によれば東征に出かける日本武尊に倭姫命は劍と火打石を授けていますが、他に明玉も授けました。

『尾張国熱田太神宮縁起』では、神劍一振りを受け「決してこれを体から離すな」と伝えました。さらに御袋を一つ授け「もし火急の難があれば袋の口を解きなさい」と言い含めたと書かれています。遠流志別石神社(宮城県登米市)社伝には

倭姫命は日本武尊に明玉を授けました。その時「頭上に載せて赴むくべし必ず勝利を得ん」と伝えました。日本武尊は東征でここを訪れた際、明玉を埋めて祠を建て祀りました。すると、明玉は靈石と化して年々小石を産むようになり、村人は「石神」と言ったと伝えられており、村名が石小石村となりました。村名は後に「石越」と書かれるようになります。これと似た話が同市の石大社にも伝わっています。



宮城県登米市 遠流志別石神社
村名は後に「石越」と書かれるようになります。これと似た話が同市の石大社にも伝わっています。

倭姫命の巡幸

やまとひめのみこと
天照大御神は皇祖神です。そのため宮殿内で天皇と志を同居していましたが、第十代崇神天皇の時代に政情不安になると、その原因は天照大御神が宮で祀られているからと考えました。そこで、天照大御神を祀るのにふさわしい場所を探すよう命じたのです。そして、その命を受けて天照大神を祀る地を定め、ために巡幸したのが、豊鍬入姫命と倭姫命の二人です。豊鍬入姫命は主に北陸の方を廻って都に戻ると、次に倭姫命が東に向かいました。大和を出た倭姫命の主な経路は次のようになります。

大和国(奈良県宇陀市)←伊賀国(三重県名張市)←伊賀市←近江国(滋賀県甲賀市)←湖南市←甲賀市←滋賀県米原市←美濃国(岐阜県瑞穂市)←安八郡から尾張国中島宮(愛知県一宮市)←清州市←桑名野代宮(三重県桑名市)←忍山宮(亀山市)←伊勢国内(津市)←松阪市←多氣郡←伊勢市←五十鈴宮(ここが現在の伊勢神宮外宮・内宮がある三重県伊勢市)



三重県伊勢市 倭姫宮(伊勢神宮)
十鈴宮(ここが現在の伊勢神宮外宮・内宮がある三重県伊勢市)